

## 学会創立記念講演 「茨城の方言」 (要旨)

金 澤 直 人

ただ今橘先生から御紹介いただいたような事情に相成っておりますが、最後のお話を皆様に聞いていただくことは、大変恐縮でもございますし、うれしくも存じております。お話ししようと思えますのは、茨城方言の大体のことを、鳥瞰図のように大観してみようということがあります。皆さんの中には他郷出身の方もおりかと思いますが、恐らく大部分の方は茨城出身で、皆さんが普段話す時は、文章に書いたり、教室で話したりする時のようには、意識して言葉を使っていないと思います。それで、茨城の人に茨城の言葉はと聞いてみても、まとまった答は返って来ないのが普通です。何となく茨城の言葉は、重苦しく、少々野暮ったいという人がありますが、どこがどう野暮ったいのか、どこがどう重苦しいのかとなると、はっきりしなくなります。そこで茨城の言葉について、一通りのことを申し上げてみたいと思った次第です。はじめに、茨城の言葉の最も典型的といっているような言葉の入ったテープが私の手許にございますので、それを聞いていただきたいと思えます。八十歳ほどのおじいさんの言葉なんです、これが茨城弁だといって天下に出してもいいようなものです。一つの昔話として、話の中味も面白いもので、場所は笠間市の上加賀田という所です。

ムガシハソノー、旧ノ二月八日ド四月八日ダナ、ソノ時ニハ、ヤグビョウ神ガアルガラ、七日ノ晩方、ミンナノウ  
ヂサ、デーマナグトイッテ、棒ヲタデデ、ヌギバサ……

茨城弁の特徴の第一として、濁音が多いことが指摘されていますが、このテープを聞いても、その印象が強いと思えます。「ムカシ」(昔)が「ムガシ」と発音され、「ニガツヨウカ」(二月八日)も「ニガヅヨウガ」となっているように、拾ってゆけば切りがありません。この伝でゆきますと、「水戸」も「ミド」となります。これらは茨城弁の大きな特徴の一つですが、実はこれは茨城だけでなく、栃木の大部分がそうですし、福島もそうです。特に東北の南奥に広く分布して

います。方言区画ということで申しますと、茨城の方言を関東方言の仲間に入れるか、東北方言の仲間に入れるかで、学会でも説の分かれるところではありますが、これを東北方言の中に入れる場合、これら濁りの多い発音も両者共通するものとして、その論拠の一つに数えられています。確かに茨城方言の音韻関係をみてみますと、東北方言、特に南奥方言がもっている特徴を、総て持っているということが出来ます。ただその度が少し弱いため、総体的にみればやはり関東方言の性格が強いということで、関東方言の中に入れるべきだという人もいます。

茨城方言には濁音が多いと申ししても、勝手に濁っているわけではありません。その言葉の語中や語尾に、カ行、タ行の音が来た場合に、本来清音であったものが濁音になるという法則がそこには存在します。ただ例外的なものもあります。例えば「金庫」は「キンコ」であって「キンゴ」とはなりません。「突端」も「トツタン」で「トツダン」とはなりません。しかしこの場合にもやはり法則があつて、その上の音に「ん」（捻音）、「っ」（促音）が来た時、語中語尾のカ・タ行の音でも濁音化せず本来の音で発音されるというものであります。

又、茨城弁には逆の場合もあります。本来濁音のものが清音に発音されるものです。「座蒲団」は「ザブトン」であるべきところ、「ザブトン」と発音されます。「プ」が「ブ」になっているのですが、この「プ」は音声学的には清音です。「三時間」が「サンジカン」でなく「サンチカン」と「ジ」が「チ」になっているのも同じです。人名の「飛田」が「トピタ」となり、「預る」が「アツカル」となります。これらはジ、ズ、ビ、ブという濁音が清音化する例で、どのような時に清音化するかといえますと、その音の前がカ・タ行の広い母韻をもつ音が来た時です。

音韻関係の第二の特徴として、イとエの区別がないことが挙げられます。「飲酒」が「インシュ」でなく「エンシ」に聞こえ、「遠視」と誤解されたという話もあります。この「エ」は「イ」と「エ」の中間の音で、ここでは「エ」と聞かえたこととなります。「エンピツ」（鉛筆）が「インピツ」、「色鉛筆」は「エロインピツ」ともなります。先の「飲酒」が「遠視」になる場合は、「イ」と「エ」の問題だけでなく、他の訛が複合していて複雑です。茨城弁では、拗音「シュ」が直音化して「シ」と発音されるからです。「詩人」と「主人」が同じ発音になるのもその例です。

特定の語に限ってみられる場合もあります。限定の「だけ」が「タケ」というのも、茨城では耳につきまします。仮定の「なら」が「ダラ」と発音されたりもします。

又、茨城弁では、ラ行の音が不安定だということが出来ます。「取るなら取ってみろ」が「トンダラトッテミロ」と、

「取る」の「る」が「ン」となります。「取らない」が「トンナイ」となるのも同じです。しかし、これらも出鱈目に現われる変化でなく、やはり法則があります。これらは、鼻音であるナ行音の前に来た時に出来ます。「取らない」の「な」（鼻音）の前に来た「る」が「ン」（捲音）になっているのであります。「取りに来た」が「トンニキタ」となるのも同じで、「ン」の下「ニ」がナ行の鼻音だからです。この現象はナ行の前だけでなく、マ行でもみられます。「知るまい」が「シンマイ」と、「る」が「ン」になるのは、その下にマ行音、これも鼻音ですが、があるからです。

話が少し前後しますが、茨城でも猿島郡などでは、語中語尾のカ・タ行音が濁音化しません。利根川中流、古河から境にかけての一带です。このあたりでは、「的」を「マド」といったり、「柿」を「カギ」、「頭」を「アダマ」といったりしないかわりに、カ行鼻濁音がありません。標準的な発音では、「ガツコウ」（学校）の「ガ」と「カガミ」（鏡）の「ガ」に使い分けがなされていて、前者は鼻にかからないカ行の本濁音、後者は鼻にかかるガ行鼻濁音で発音されます。即ち共通語では、語頭のガ行音は本濁音、語中語尾のものは鼻濁音です。ところがこの一带では、カ・タ行の濁音化がないかわり、語中語尾のガ行音も本濁音で発音されているのです。ですからここでは、「ガツコウ」（学校）の「ガ」と「シヨウガツコウ」（小学校）の「ガ」が同じになります。

語法関係では、使役の助動詞「せる」「させる」がありますが、このうち「させる」が「ラセル」となります。「考えさせる」が「カンガエラセル」となるのがその例です。「書かせる」はそのままです。又、助詞の「へ」「に」を「サ」というのも茨城弁にあります。この分布は広いようです。

動物の後に「メ」をつけるのなど、段々聞けなくなりますが、先のテープにも出てきました。「牛メ」「馬メ」「蚊メ」「蛇メ」など、どちらかというと、小動物につけるようです。牛や馬は大きいですが、人間との親密な関係からつけられているのでしょう。「象メ」「ライオンメ」とは、いわないようです。この「メ」は広く使われているようにお思いでしょうか、実は茨城と栃木の一部、それに八丈島ぐらいで、かなり貴重なものです。

言葉の面でもなかなか面白いことばがあるのですが、挙げれば切りがありません。物を他に移すことを「イシヤラカス」、人を動かすことを「イシヤレ」というのなども、なかなか味のある言葉です。そろそろ時間がきてしまいましたので、私の話はこの辺で終りにしたいと思います。どうも長時間、御清聴ありがとうございました。